
アンドラハルの魔王

J . I . A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンドラハルの魔王

【Nコード】

N6103Z

【作者名】

J・I・A

【あらすじ】

魔法文明がまだ未発達な異世界。天空城にて最終決戦を控え、勇者の仲間達は千里眼ですべてを見てきた妖精を中心に過去を振り返る。

プロローグ 天空城にて

五一三年、天空城がまだアーディナルの空を飛んでいた時代。王の間を目前にして、廊下に座り込みをする者達がいた。

お互いに顔を見ようとせず、ただ黙って時が来るのを待っていた。

剣豪サージッドノヴァンはいらついた様子で、さきほどから剣の鍔をもてあそんでいる。

王の間で戦いが始まれば、すぐにでも飛び込むつもりだった。

「とうとう、この時が来ちゃったな……」

「ああ……」

彼の声に応えたのはアツカ、西部のバーリヤ平原からやってきた狼族の戦士だ。

人前では帽子を目深に被って獣の耳を隠しているが、ときおり口の端をつり上げて異様に発達した犬歯を見せる癖がある。魔法は使えない。

「この戦いで全てが終わる。魔界が滅びるか、人界が滅びるか」

「しかし、本当にこれで全てが終わるのか？」

口を挟んだのは賢者オルフェウスだった。

卓越した魔法の使い手だが、この中で最も若年と言って過言ではない。体に合わない大きな魔法の杖を抱え、常に最大の力が出せるよう、魔力を温存している。

「僕にはとてもそうは思えないんだが……」

「オルフェウス、迷ってはいけないわ」

女剣士イーラは落ち着いて彼を諫めた。

普通の男性よりも体躯の大きな彼女は、サージよりも大きな超巨剣の使い手だ。剣と呼ぶのも憚れる建物の柱のような武器を、今は椅子代わりにしている。

「目の前にこの城の主が居る、この城はイーサファルトを指して、今もなお人界の上空を飛びつづけている。このまま行けば間違いなく戦争になる、私たちはそれを阻止しなければならぬ。いま私たちが考えていいのは、ただそれだけよ」

「分かっちゃ居るけどさ……」

「あ……あ……あの……みな……みな……さん……」

おどおどしながら、ようやく声を挟むことができたのは尼僧のサーラだ。

ゆったりした西部の民族衣装を着ていて、髪飾りを頭が重くなりそうなほどたくさんつけている。彼女は治癒の力を司る水の精霊ゼテンを信仰しており、多少ではあるが治癒魔法が使えた。

「わたし……しは……その……あの……ひと……が……まさか……あの……ひと……だって……たくさん……助けて……くれたし……わたし……魔法……へた……だけど……あのひと……上手……
なんで……なんで……あのひと……今は……敵……よく……よく……わからなくて……」

サーラはうまく言葉に出来なかったらしく、結局黙ってしまった。沈黙を破るように、アツカは言った。

「ゲールハーツが言ったことには……」

「やめるんだ、アツカ！」

サージは立ち上がって彼を怒鳴りつけた。サーラは泣きそうになつて耳をふさいだ。

「もう死んだ奴の事をいちいち気にするな！ あいつは死んだ、これからこのパーティがどの道をたどるかは、残された俺たちが決めることだ！ ミュン！ ……おい、ミュン！」

ただひとり、知らない顔をして窓の外を眺めていた女性が居た。森の管理者サテモのミュン＝アシケンだ。彼女のとがった耳は遙か遠くの出来事を聞き、目の前の出来事のように知ることが出来る、《良き耳》と呼ばれる耳だ。

「お前なら、何か知ってるはずだろう……お願いだ、教えてくれ、あいつは、本当に魔王だったのか……！ どうして俺たちを助けたんだ……！ ただ味方のふりをして俺たちに取り入って、体よく利用していただけだったのか……！」

ミュンは、長い耳をぴくぴくと動かして、困ったように首をかしげた。

「その質問に答えるのは難しいわ」

「そんな筈はないだろう……！ お前は全てを見て知っているはずだ！」

「サージ、私にはこの戦いそのものが複雑すぎてわからないの。一体誰が魔王で、誰が勇者だったのか。私には魔王は何人もいたような気がするし、勇者だって何人もいたような気がするわ。そもそも魔王とは何なの？ 勇者とは何なの？」

ミュンの回答に、一同は息を呑んだ。サージはむしろ怒りさえし

た。

「ふざけんな……！ 決まっている、魔族の王が魔王！ 魔族を束ねる者だ！ そして人間に害悪をなすそいつを征伐する代表が勇者だ、お前はそれを今まで知らずに戦ってたのかよ……！」

憤慨する彼に対して、どうして怒りを買ってしまったのか、という複雑な面持ちをするミュンに、オルフェウスは優しく諭した。

「ミュン……今の私たちに必要なのは、サテモの哲学的な話じゃないんだ。彼が我々の敵だったのか、味方だったのかという、すごく単純な話だ」

「敵だったかもしれないし、味方だったかもしれない。どちらにもなれたかもしれないし……最初からそうなるように決まっていたのかもしれない。……結果として彼は魔王で、彼女は勇者になってしまったわけですが」

ミュンの不思議な回答に、とうとうオルフェウスも困惑するような顔つきになってしまった。

答えがいつか手に入らず、いったいどうしたものかと顔を見合わせる英雄達の間で、ミュンはふんと息を漏らした。

「単純に言い表すには、この戦いは複雑すぎるようです……なら、順を追って話しましょう、私たちと巡り会うより少し前の、《魔王ミュシャ》と《勇者エーサ》について」

勇者エーサ

二年前、イーサファルト王国、ホルへ高原、公爵の城。

ゲールハーツは頬をしきりにかいていた。目の前に少女が居る。黒髪に黒い瞳、体は男物の鎧を着こなせるほど大きい、しかし、肌は触ると溶けそうなほど白い。

この少女に、勇者にふさわしい剣の手ほどきをするのが彼の役割である。

「エーサさま、そう何度も何度もお城を抜け出されてはこまります……ヘグニ公にお役目を仰せつかった私どもを困らせないでください」

少女は、つーんとそっぽを向いた。

「礼儀作法の授業にはちゃんと出ております」

「それで礼儀作法が身についていないのではお話にならないではありませんか」しかも語尾が微妙に変だ。

「失敬な、国語の授業にも、教養の授業にも、魔法の授業にも、ちゃんと出ております」

「ちゃんと出ていないの私の授業だけですか……」

ゲールハーツはぶるぶると拳をふるわせた。いったいどういう意味だ。

教える立場の彼も年のころはさほど少女と変わらないので、ひよつとすると彼だけ舐められているのかもしれない。

ゲールハーツはまだ二十代前半の青年である。七年前に元服し、

アルト公爵に仕える一介の正騎士という身分になった。

いままで何人か新人の剣術指南を受け持ったことはあるが、彼女には優秀な新人になくはならない「やる気」がない。

まるで精神修養のために嫌々騎士にさせられた貴族のぼっちゃんさながら、やらされている感が見え透っていた。アーディナル中部では伝統的に若い頃に騎士見習いをする家系が多く、ゲールハーツもそついった新人を受け持ったことがある。

「エーサさま、あなたはご自分がいつたい何者であるかという自覚が足りません。あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！ ドラゴン・ライダーの赤い星に導かれ、異世界より現れた勇者だ！ アンドラハルの魔王を討伐し、この世に更なる光をもたらす救国の英雄である！」

「英雄である！（キリッ、じゃありません。それでは用意された台詞をただなぞっているだけではありませんか！ そうではありません、ご自分の言葉でおっしゃってください、あなたは何者ですか？」

「我が名はエーサ！ ……」

反射的に言ってしまったエーサは、はつとしてしばらく固まっていた。どうやら続く言葉がでなかったらしく、ふいに涙目になった。

「……………ううう、だって、これを覚えなければご飯が食べられなかったんであります……………」

はっ、そうか、授業をサボったら、ご飯ぬきにすればいいのかとゲールハーツは一瞬感心してしまったが、相手は救国の勇者だ、一介の家庭教師にご飯抜きなどという強権が発動できるはずもない。ここはあえなく断念した。

しかし……………驚くべき記憶力だ。

ドラゴン・ライダーの赤い星が最後に出現し、北の遺跡で彼女が

発見されたのがつい三ヶ月前。ヘグニ公爵によれば、そのとき勇者はこの世界の言葉をまるで話せなかったという。

伝説の勇者を見つけたことを、王にはすでに報告してしまった……なんとか王に会わせられるぐらいには教養をたたき込まねば、ということでは彼らが家庭教師として公爵領に招かれ、朝から晩までみっちり徹底的に教育を施しているのである。

この短期間で言語は不自由なくらい習得してしまったし、これだけの長台詞をすらすらと暗記してしまったのはさすがだ。魔法使いに向いているかもしれない、きっと呪文を覚えるのも容易だろう。

「ゲールハーツ、もし王からそういう質問があったら、私はどうすればいいのでありましょうか？」

「素直におっしゃったらどうです？ 元いた世界の事でも」

「私は元居た世界の記憶を忘れてしまったのであります……なにも覚えていない、気がついたら遺跡に倒れていた……」

エーサの声は、すこし震えていた。

「私はどうすればいいのでありましょうか？ 本当は自分が何者で、どこから来たのか、本当に勇者であるかどうかも分からないのであります……」

ゲールハーツは、エーサの肩をがっしと掴んだ。

薄い灰色の瞳を持つ彼が生涯見たこともない、漆黒の瞳をまっすぐ見ると、まるで瞳の中に吸い込まれそうだった。

「エーサさま、あなたは勇者です。そして我々の希望です。……我々にはあなたをお守りする義務がある、そしてあなたにはその献身に報いる義務がある、それが信頼というものです」
「わたくしには良くわからないであります……」

「分からなくても結構です。授業をお休みになるときは、遠慮なさらずに私におっしゃってください。急にいなくなつて、下々の者達をむやみに不安にさせるようなことだけは、おやめになってください、それは勇者のすることではございません。あなたは我々の希望なのですから。いいですね？」

唇をとがらせたり、きゅっと結んだり、エーサの心の中は色々と忙しそうだった。

ようやく、おそろおそろと言つた風に声を出した。

「ゲールハーツ……今日は休んじゃダメ？」

「今日はもうお疲れですか？」

「ううん、これから薬草摘みに行くのであります」

「いいでしょう。あまり遠くへ行かないように。それと基礎練（素振り三千回、ダッシュ五千回、腹筋背筋二千回）だけでもやっつけてくださいね」

「やっつけられるかー！」

エーサはつかつとなつて鋭いまわし蹴りを放つた。彼女は鎧を身にまとい、脛にまともにあたつた威力は強烈だった。ゲールハーツが悶えている間に、勇者はその場から逃げ出した。

「きよ、今日是用事があるから休むのでありますー！ これにてー！」

「ま、待ってください！ 《伝説の勇者様》には軽いメニューですよ……？ 一体、どうしてそんなに嫌がるんですか……！」

ゲールハーツの中の勇者基準は、とてつもなく高かった。

それがエーサにとって重荷だったのは言うまでもないが、それだけエーサは期待されていたということだ。

それが《勇者エーサ》だった。

魔王ミュシャ

ミュシャは一枚のカードを天井に掲げ、そこに書かれた魔法文字をにらみつけた。

ウェン（X）、Wの発音を表す。闇の精霊ルージャ（LWG）の第二文字で、あまり縁起のいい単語を連想しない。

雪、消滅、減衰、減少。

そのなかで彼の未来を表す最も適当な言葉は、『消滅』だろう。彼は残ったカードを放り投げて、ソファに仰向けになった。

「……参った」

このままではいずれ、彼も本当に消滅しかねない。

「ミュシャさまー、ミューシャーさまー」

ドアが無遠慮にがんこん叩かれて、ミュシャは眠りにつこうとしていた眼を不機嫌そうに開いた。

長い白髪、痩身。ワイシャツを着崩し、瞳はエメラルドの緑色にも海の青色にもみえた。

「ミュシャさまー、そこに居るのはわかっておりまするー、ご自分では外に出ることの出来ない引きこもりの大魔法使いミュシャさまー、エーサが参りましたよー、お返事なさってくださいー」

ああもつ、とため息をついて立ち上がった。
いちいち煩い奴だ。

ドアを開くと、薬草を両手一杯に抱え、満面の笑みを浮かべた少女がいた。

「薬草とって参りましたよー」

ミュシヤは複雑な面持ちで少女を眺めた。

顔は多少汚れていて、擦り傷もできている。

逃亡中の身である今の自分は、薬草を探りに外に出ることすら出来なかった。

こんな少女に頼らなければ生きていけない現実に、情けない思いをする。

「薬……」

「はい？」

「薬をやる、上げれ」

「はいっ」

ミュシヤは薬草をひとつひとつ分別すると、水につけて汚れを落とし、大きな鍋の中で湯がいた。

彼がこの空き家に転がり込んでから三ヶ月が経つが、ここに訪れるものはこの変わり者の少女か、さもなければ行方不明になった彼女を捜索している城の兵士だった。

むろん、ミュシヤは今まで城の兵士に彼女を差し出したりはしていない。そんなことをして目をつけられたら余計に困るからだ。

屋敷中にあふれている魔法の装飾品や実験道具の類いから見て、どうやら高名な魔法使いの家であることは間違いない。

だが、いまはその主が不在である。ミュシヤが待てども待てども、いつこつに訪れる気配はなかった。

死んだのか？

ミュシャは時にそうつぶやく。空っぽの屋敷に響いた声は、やたらと真実味を帯びている気がする。

けつきよく彼はこの少女に頼らざるを得なかった。

回復薬が完成するまでの間、^{ボーション}エーサはおとなしくテーブルの席で待っていた。

「次の材料だが……」

ミュシャは本棚にぎっしり詰まった本のなかから、一冊を選んでそれを彼女の前に広げてみせた。

分厚い魔道書は複数のページに何百もの栞がはさまれ、深海魚のヒレのようになっている。

「これだ、『偽りの金塊』と『お化けネズミの爪』。これが必要だ」

このぐらいならすぐに手に入るだろう、と思われるものだった。

エーサはテーブルに身を乗り出して、じいつと魔道書をのぞき込んだ。

黒髪がふわりと鼻をくすぐって、ミュシャは彼女が毎日体を清潔に保っている事を知る。

「これを持ってくれば、よろしいのでありますか」

「そうだ」

「ミュシャさま、これは一体なんの材料になるのでござりまするか？」

ミュシャはほんの一瞬だけ答えにつまんだが、うるたえる素振りもみせずに即答した。

「秘密だ」

「ミュシャさまのクエストはいつも謎が多いのであります……」

「お前こそ、どうしてそう頻繁に回復薬をほしがる？」

「剣のお稽古が厳しいのでござりまする……」

エーサはため息混じりに言った。

「特に先生が『伝説の勇者さまならこのくらい出来て当然でしょう』なんて言っつて、無理難題を押しつけてくるのであります……ミュシャさまの回復薬ポーションがなければ、とつくに死んでいる身なのであります」

「ひどい話だ」

ミュシャは眉をしかめた。

彼女が伝説の勇者であるという話は、出会ったときに聞いている。「それはいつたい、どういう伝説なのか？」という問いに対し、エーサが町に出かけて話を聞いて回った結果、

「はい、どうやらこの国には偉い予言者さまが居て、その予言者さまが予言を残されたそうなのです。『次に空に赤い星が出現したときに、その星の出ている方向から三人の賢者さまが一人のお客さまを連れてくる、そのお客様が魔界を征服する伝説の勇者さまだ』と言われていたそうです」

という情報を手に入れて戻ってきた。

はからずも、ミュシャが彼女にあたえた最初のクエストとなった。

「……最近、あまり自信がないのであります」

鍋はくつつくと煮たっていた。

頃合いを見計らって、ミュシャは席を立った。どろどろになった薬草に少量の光の石の粉をまぶし、失われた魔力を補完する。そし

てそのまま瓶に摘めていった。

「なぜだ。お前はまさにその『三人の賢者が連れて帰った客人』なのだろう?」

予言にある赤い星は、出現から三ヶ月が経った今なお、同じ方角に輝き続けている。

この町から見て南方、そこには見捨てられた古代遺跡があるだけだ。さらに南に行けば広大な魔界が広がっている。

エーサはそこでふらふらしている所を発見されたという。ヘゲニ公爵の遣わした三人の賢者が彼女を連れて帰ったらしい。

「間違いないのであります。けど、戦うのが嫌なのであります。剣を見ると、恐くて震えてしまうのであります」

「臆病な勇者というわけか」
「で、でも、魔法なら大丈夫なのであります!　きっと私は剣より魔法の方が得意な勇者になるのであります!」

エーサはがたつと椅子から立ち上がった。ミュシャは怖気がするほどの長身で、かなり背丈の高いエーサが彼を見上げなければならなかった。

「ミュシャさま、よろしければ、その、エーサに魔法をご教授ねがいますか?」

「ま、魔法を……?」

なぜかミュシャはすぐに返答できなかった。

「……無理だ」

「なぜであります?　お願いであります、大魔法使いのミュシ

やさま。生まれて初めて使った基礎魔法で火の玉を生み出したら、町をひとつ消し飛ばしてしまったことのあるミュシャさま！」

「お前はそういう記憶力は抜群だな……答える必要は無い、ただ教えられないだけだ」

エーサが、むーっと膨れていると、ミュシャは回復薬ポーションの入った瓶を押しつけるように渡した。

「薬はやる。今日の分だ、持って帰れ」

「帰りたくありません」

「どうした」

「……塗って欲しいのであります」

顎をついとあげ、せがむように彼を見上げた。

ミュシャは瓶のコルク栓を抜くと、油っこい液体を指につけ、真っ白い額に軽く塗りつけた。

一瞬ひるんだように眼を閉じるエーサに、立て続けに頬や顎に塗りつけていった。

擦り傷はしゅっつと音を立てて消えたが、まだ彼女はむすつとしている。

「クエストに成功したら、また塗って欲しいのであります」

「唯のただっ子だな、勇者は」

「《偽りの金塊》？」

相談を受けたゲールハーツは、その内容に眼を見張った。

エーサはいたってまじめだったが、かえって彼は困惑した。

「どうして、そんなものが欲しいのですか？ 普通の金塊より価値は数段劣りますし……長く持つっていると持ち物を腐食させる力があって、食糧や装備が劣化していくと言われています……」

「今すぐ欲しいのであります。ゲールハーツ、なんとか手に入らないでありますか？」

「そんなもの、普通は売っていませんよ。コボルトがたまに落としますが、冒険者だって大抵はその場に捨てていきますから……そう、それでコボルトの出現する洞窟に落ちていたりして、冒険者が通っていたことが分かったりしますね」

「コボルトの洞窟……」

彼の言葉にヒントを得たらしい、エーサはなにやら口の中でぶつぶつ呟いていた。

ゲールハーツに理由は分からないが、彼女はどうかやらそのアイテムがどうしても気になるらしい。

やがて彼ははっとひらめいた。

そうだ、これだ。これは利用しない手はない。

「エーサさま、次の稽古は、お休みで構いませんよ」

ゲールハーツは思い切って言った。エーサはため息をついた。

「また？ けどけつきよく基礎練はしなくちゃならないんでしょう？」

「いいえ、基礎練はいつもの半分で構いません、時間がもったいなのですからね。……次回からはいよいよ実践です、公に許可をもらって、コボルトの洞窟に行きましょう！」

その男がどうして人界にいたのか定かではない。

しかし、決戦の日まで様々な形で勇者と関わりあってきたのは確かだよだ。

少なくとも、エーサが魔界を制圧する勇者になるまで成長してゆく上で欠かせない、重大な人物であったはずだ。

それが魔王ミュシャだった。

正騎士ゲールハーツ

テーブルに置かれた《偽りの金塊》を見て、それからエーサを見て、ミュシヤは眉をしかめた。

洞窟に行くだけだけの簡単な依頼だったが、前回にもまして、さらに怪我が増えていた。頭や腕に巻かれた包帯が生々しい。さらにコボルトに鎧を朽ちさせる魔法が使われたらしく、鎧も損壊が激しかった。

にもかかわらず、少女はにこにこしているのである。まるでご褒美を与えられるのを待っているかのようだ。

「えへへ、えへへ」

などともじもじしながら呟いている。
ミュシヤはさりげなく距離を置いた。

「……薬はやらん」
「ええーっ！」

エーサは椅子をがたつと鳴らし、半泣きになって抗議した。

「どつしてでござりまするか！ なぜでござりまするか！ あんまりでござりまする！ わたくし、その為だけに頑張つて金塊を取ってきたのに……！」

「とんだマゾ勇者だな。材料を私の所に無事に届けることを優先しろ、コボルトはお前のレベルで敵う相手じゃないだろう……！」

まさか、真正面から戦つて金塊を奪つてくるとは思わなかった。ミュシヤは頭をかいた。

「私の薬に頼ってわざわざ危険なまねをするようなら、もう薬を渡すつもりはないからな」

「だって……だって、ゲールハーツ先生が『勇者たる者、どんな使命にも全力をもって当たるものです』と……」

「そのゲールハーツ先生つてのは一体なんなんだ、勇者の伝説量産機か？」

ミュシヤは《偽りの金塊》を手に取ると、小さな壺に放り込んで素早く蓋をした。

このアイテムはコボルトの魔力によって金塊に似た姿をしているが、本来は周りの物を腐食させる力に特化した特殊な水の魔石である。

こうして壺の中に封印しておかなければ、屋内では安全に保管することすらできない。

彼は屋敷から外にこそ出ないが、魔物や魔法の材料に関しては桁外れの知識を持っていた。

「ゲールハーツ先生は、アルト公爵という方にお仕えしている正騎士さまであります」

「肩書きだけで嫌な奴だ……」

「そう！ そうなのであります。なんだかすごく偉そうな人で、ヘグニ公爵さまにお仕えする兵士達はみんなあのお方に頭が上がらないみたいでござりまする。そのうえ偏屈な堅物で、頭痛がするくらい几帳面で、その日に起こったことを事細かく手記に書き留めておくのであります！ 笑った所なんか一度も見たことがありません。そのくせ私がピンチに陥るとどこからともなく現れて、いとも簡単に敵をなぎ倒して、『大丈夫でございますか、勇者さま』なんて心配するような声をかけて、そのたびに残念そうな顔をなさるのでござりまするよ、心の中では『なんでこんな出来損ないが勇者な

んだ？』みたいな……！」

むきー、と唸って、エーサは悔しそうにハンカチを噛んでいた。
ミュシャはいい加減に辟易してきたらしく、彼女の愚痴を聞きながら今日の分の回復薬作り本ジョンに取りかかっていた。

ゲールハーツは昔の夢を見ていた。

彼の生まれた町はとある小さな港町だった。そこには父と母と、兄がいた。

剣の師もいたし、友人もいた。その頃の彼はまだ屈託無く笑うことが出来た。

だが、そこにあった多くの物は、あるとき炎によって瞬く間に崩れ落ちてしまった。

二十年前、イーサファルト王国とアンドラハルとの間に戦争が起こったのだ。

母は屋根の上に逃れ、まだ幼かったゲールハーツをずっと抱きしめていた。

火の精霊、太陽神エークラーケス、災害の名を持つ盲目の巨人よ。

その絶望的な高さの耳に祈りが届いたならば、たとえ世界を踏みつぶしても、どうかこの子だけは……。

そのとき彼女は胸を槍に貫かれて、すでに死んでいたはずだった。しかし、ゲールハーツの耳には母の声が何度も繰り返して聞こえていた。

町が燃える姿を彼は見ていない。ただ町はひどく熱かったのを覚えてる。

視界に映っていたのは漆黒の空と、二十年前にも出現したドラゴン・ライダーの赤い星、そこを飛び交う翼を持った無数の魔物達だけだった。

ドラゴン・ライダーの赤い星が出現するとき、同時に地上には偉大な英雄が出現すると言われている。

だが、英雄の姿はそのときどこにも見えなかった。

いまはその星が不気味にゆがんでさえ見える。

彼は母の服を掴みながら、英雄の出現をただひたすら切望した。

そして、彼は魔物の背にまたがった男の姿を見た。

ぞつとするような長身の男だった。光を放つような白髪を風になびかせ、美しい白い肌を持っていた。さながら光が戦士の形をして前進していくようであった。

その両目は不気味な赤い光を帯びて、一瞬だけ彼の方を見た。

その顔はいまでも記憶に残っている。

男はそのまま魔物の群れと共に飛び去ってゆき、彼は二度とその姿を見なかった。

そこでゲールハーツは目を覚ました。

……眠ってしまったか。

どうやらうたた寝していたらしい。

目の前には緑豊かな草原がひろがっていた。向こうの山までうねうねと続く花畑に蝶が舞っている。

「つかまえたーっ！」

目の前の草むらから大きな声がして、ゲールハーツは慌てて体を起こした。

そこにはお化けネズミを胸に抱えたエーサが居た。白い腹をみせた巨大なネズミは、短い手足をしきりに動かして、じたばたもがいている。

「ゲールハーツ、やりました、勝ちました！ 私の勝ちにござりまする！」

エーサは、にっと得意げに微笑んでみせた。

屈託のない笑みを見て、ゲールハーツはようやく笑うことが出来た。

あの災害でただひとり生き延びた彼は、様々な物語に現れては魔王を征伐する伝説の勇者に心酔するようになった。

そして、いつか勇者のような英雄に仕える事を夢見ていたのだ。

そうだ、彼女が本物の勇者になれるかどうかは、自分の手にかかっているのだ。

なんとしても、いや、たとえどのような手段を用いても、彼女に真の勇者としての力に目覚めてもらわなければ。

そのためには、命の一つや二つくらい危険にさらしても、構うまい！

ゲールハーツの手記（エーサファルト王立博物館貯蔵品）より抜粋

彼が生涯で二度目に目撃した赤い星は、その頃まだ南の空に輝い

ていた。

その姿は、気のせいかな日増しにだんだんと大きくなってきている
ような気さえした。

公爵領ホルト高地

偽りの金塊、お化けネズミの爪、闇コウモリの目玉、マッド・オックスの心臓。その他の数種類の材料を混ぜ合わせ、鍋で煮詰めること数時間。

出来上がった魔法薬^{エリクサー}を眺め、眉をしかめ、ミュシャはもう一度魔法道書を見た。

……飲み薬ではあるまいな。

アンドラハルの魔族が扱う魔法体系は第七属《天魔法》と呼ばれている。

いまだ決定していない『運命』を決定する魔法。

また、その運命を決定する力を応用して、さまざまな物を操ったりする。

庭に出たミュシャは、光る五本の指をばらばらに走らせ、空中に複雑な模様を書いていた。

意味を持たない単語や文字列に意味を持たせ、格段に扱いやすい魔法を編み出しているのである。

「……単位呪文『S/I/E』は各々《ペリル・モンドの術式》を発動する……

……そのうち『S』は火の精霊マクムン・ドウシユの『ファイアLv1』を……

……また『I』は風の精霊シジェールジエムの『シヨート・ブリーズLv1』を……

……また『E』は土の精霊ドルドヌークの『標的設定』を発動する……

……最後に魔法文字『アーケス』は複合呪文『S・I・E』を発

動する……」

一般の天魔法とは多少異なる、王家にのみ伝わる格式張った式である。

彼の呪文によってそれぞれの運命が決定され、複数の精霊が彼の周りに募り始めた。

いける。魔道書にあったとおりだ。

この薬は、確かに彼の魔力を増幅させてくれている。

ミュシャは力が蘇ってくるのを感じて、おもむろにひときわ大きな図形を描いた。

「『アーケス（ ）』！」

四角形の光の輪っか空中に現れ、下をのぞく三つの辺に光が宿り、それぞれから、ぱりぱりぱりっ！ という音と共に白煙が舞い上がった。

彼が出したかったのは光と煙と音ではなかった……どうやら失敗である。

しかも間の悪いことに、ちょうどエーサがやってきていたらしかった。

彼女は庭で魔法の練習をしているミュシャを見て、目を丸くしていた。

「あっはっはっはっは、ごきげんよう、ミュシャさま、ところで、さっきのはいったい何の魔法でござりまするか？」

「くっ……笑っている」

ミュシャはばつの悪い顔をして屋敷に引っ込んでいった。

屋敷の奥に入ってゆくと、大鍋の部屋には棚から机の上まで、至る所に瓶が置かれていた。

器の形をした物はすべて、どれも深緑色の魔法薬エリクサーが詰まっている。両手に持ちきれないほどの瓶を抱えたエーサが、目を星で一杯にして歓声をあげた。

「う……うわあ〜っ、こ、こ、こんなに沢山の魔法薬エリクサーを、たった一晩で作られたのですか！ 一体、どんなご褒美をくださるおつもりにござりまするかあ〜っ」

「お前の分じゃない、それ以前に、お前の薬の使い方に関する認識は絶対に間違っている……」

「はっ、も、申し訳ありません……ミユシャさま、ところで、どうしてこんなに沢山お薬をつくられたのでござりまするか？」

まじめに質問を受けたミユシャが、

「もうお前が屋敷じいに来なくてすむように」

と、答えると、エーサは

「いらんわーっ！」

と言つて抱えていた瓶を投げ捨てた。

「ああもう、こんな辛気臭いところにいたのでは、ご病気をめされてしまいます！ いま、町は収穫祭をしている最中で、露天やら大道芸やらがたくさん集まって賑やかでござりまする！ ミユシャさま、きつと楽しいので、お外に参りましょう！」

こんなに沢山の人間がこの土地に住んでいたことを、ミュシャはここに来るまで知らなかった。

このホルへ高地は魔界と人界の中間、いわゆる緩衝地帯だった。日の注さない土地を好む魔物は好んで住み着かず、人間も麓との交通が不便なため定住することはなかった。

少なくとも、彼が人界に戦争を仕掛けたとき、この山には山頂に古代遺跡があっただけの寂しい山だったはずだ。

水を売る露天を営んでいた主人は、にこにこして小銭を数えながら教えてくれた。

「この町はつい最近できたもんだよ。公爵様が去年の戦争のときにここに砦を建てて、魔族の侵略を御料地の手前で食い止めたんだ。公爵様はその功績が認められて、ここに新しい町を築く事を許された。ほら」

彼が指差す方角を見ると、色鮮やかな三角旗の向こうに、針山のような要塞が見えた。

公爵の砦、いまは公爵の居城だ。

「魔界と隣り合わせの土地だが、こうやって公爵様がにらみを利かせていてくださるお陰で、俺たち平民も平和にいらしているさ」

「ヘグニ公爵さまって、偉いお人だったんですか？」

「そりゃそうよ。なんせ前回のドラゴン・ライダーの星に選ばれた勇者さまだからな。勇者さまってのは、こうでなきゃいけねえ」

エーサは水の入ったカップを持ってきて、ミュシャに手渡すと、その隣にどっかりと腰を下ろした。

冷たい金属カップのふちに軽く口をつけて、ミュシャは尋ねた。

「今日は一体どんな用事で来た？」

「……回復薬ポーションを作っていただけだったのであります」

エーサは祭りの空気にそぐわない浮かない顔をしていた。

見たところ鎧は新品になっているし、剣も幾分グレードアップしている。

それ以外は怪我もなさそうに見えた。

「怪我をしたのはわたくしではないのであります」

「ほう」

「ゲールハーツ先生であります」

エーサは人差し指を自分の目の下にあてがい、目頭から目尻まで、ぐいっと短い弧を描いた。

「剣術の稽古中に、手が滑ったのであります」

「お前がつけたのか？」

「……」

エーサはうつむいて、不意に泣きそうな顔になった。

「ミュシャ、勇者になると言うことは、戦わなければならないという事にござりまするか」

「ああ、そうだろうな」

「私は剣が恐ろしいのであります。剣を見ると、震えが止まらないのであります。今も、先生を傷つけた感触がこの手に残っております。ミュシャ、わたくしはあなた様のような人になりたいのであります。あなた様のようにお薬を作って、誰ひとり傷つけることなく、人を癒しながら生きるような生き方がしたい……それは

勇者にはできない生き方なのでありますか？」

ミュシャは、ふむ、と行って、空になった金属カップを脇に置いた。

マントのしたから葉巻を取り出すと、魔法で熱くなった親指に押し当て、火をつけた。

葉巻に火がつけられるようになったただけでもよしとすることにした。

「……申し訳ありません、あなた様に聞いてもせん無いことを」

「いや、よく分かる。私も父が王をやっていないければ、今ごろ何をしていたかと考える事もある」

「へ……」

「……」

「ミュシャさま、失礼ながら、あなた様のご職業は？」

ミュシャは、ふうとドラゴンのような煙を吹いた。

「王様」

エーサは目を丸くしたが、やがて秋空に響く大きな声で笑った。

「ただいまでござりまするー！」

屋敷の戻ってきたミュシャとエーサを、一匹のお化けねずみが出迎えた。

まるで野性味のない動きで、のそのそとエーサの足元に近づいてくる。

彼女は太った胴体をつかみ、よいしょと抱えあげた。

「おおー、そなたも無事であったか！ ……むっ？ そこはかとな
く痩せてはおりませぬか？ ミュシャさまー！ ちゃんと餌はお与
えになられておいでなのですかー!?」

「私の手からは食わんのだ」

どうやらこのねずみに情が移ってしまったらしいエーサが、「城
では飼えないのでありますー」と泣きながら頼みにきて、以来ミ
ュシャが屋敷にかくまう事になったのだった。

お化けねずみは暗黒の半島アンドラハルに住むことができなかつ
た魔物の中でも、日の注さない夜の時間帯からもあぶれてしまい、
ついには無理をして昼に出てくるようになった低級魔物である。魔
物というより動物に近く、ほとんど浄化されかかっている。

「しばしお待ちをっ！ 今、わたくしが精のつく料理をお持ちいた
しますゆえーっ！」

エーサは大鍋の部屋に駆け込んで、なにやら部屋中を引つ掻き回
すような騒音を立てていた。

薬を作つて、誰ひとり傷つけることなく、人を癒しながら生
きるような生き方がしたい

果たして、そんな生き方が可能だろうか？

だが、魔界でも人界でもない、この狭間の土地でなら。

魔王として以外の生き方も、ひよっとすると可能ではないのだろ
うか？

そう思いかけた時だった。

ミュシヤさま。

不意に、ミュシヤは時間が止まったように立ち尽くした。

足元のネズミは二本足で立ち、目を怪しい紫色に光らせていた。

ご安心ください、私は《コツシユート》の者。先代魔王に忠誠を誓ったアンドラハルの竜族ドラゴンにございます。今はこの魔物の体を借りてお話しております、ご容赦ください。

ミュシヤは壁に背中を預け、目を閉ざしたまま天井を仰いでいた。

ばかな、私は今、一体何を考えていた？

ネズミのほうに視線をおろすと、ミュシヤは地獄のそこから響いてくるような声音で言った。

「……………許す」

はっ、現在、リノフの政権はシルト一族に完全に掌握され、アンドラハルの各地で暴虐の限りを尽くしております。わが国の動きをけん制するようにアリハラン、ソルベール、ヘルダームの三大国が同盟の離脱を宣言、反乱軍が起こした混乱は魔界全土にまで広がっています。

ミュシヤは壁に後頭部を打ち付けた。

……………なんてことを。

異形の魔物たちが各々の国家を築いていた魔界で、この同盟を築いたのは彼の祖先の偉業だった。

「反乱の首謀者はシルトの者か？」

さよう、ゼブル将軍にございます。

先代の右腕だった男だ。

一体何を血迷ったか。

あの男ほどの切れ者なら、リノフにとってこの同盟がどれほど重要なものであったか、その価値が分からないはずはない。

我々コツシユートは地下活動を通じ、シルト一族に反目する民族同士の結束を強めております。シルト一族の政権を廃し、ミュシャさまとその一族を再び王として迎え入れる準備を進めております。時が来れば、必ず我がコツシユートの竜がお迎えにあがりますゆえ。今しばらくのご辛抱にございます、ミュシャさま、どうかどうか、ご無事で！

ミュシャが顔を上げると、エーサが大鍋の部屋からこっそり顔を出していた。

顔はなぜか煤だらけになっていて、どんな焦げ臭い料理ができたのかしのばれたが、彼女は満面の笑みをたたえてネズミを呼んだ。

「できましたでござりまする、ほかほかでおいしいですよー！」

気がつくくと、ネズミの目から紫色の光が消えていた。

ひくひくと旨そうなおいを嗅ぐと、彼はミュシャの前から躊躇いなく消えた。

おしりを振ってよちよちと歩くさまは、まさにただのネズミだった。

公爵ヘゲニ

「 エーサさまは回復薬ポーションを手に入れる為に、週に三・四回、多いときで五回、この屋敷の男のところに通っているものと思われます」

寝不足のゲールハーツは、ぼんやりと密偵の報告を聞いていた。運命の星が現れてからはや半年、躓きながらも鍛錬を積み重ね、徐々に勇者らしい力を身につけてきたエーサであったが……。

やはりときどき彼らの目をかいくぐっては、城を抜け出していたのである。

ふらつと外に行ったまま、夜まで戻ってこない事もあった。

公爵に知られれば首どころの騒ぎではない、これでは落ち落ち寝ても居られない。

いったいなぜ。これは何かある、と思って、密偵に探らせていたのだが……。

「……伝説の勇者さまとあろうお方が……まさか、『男通い』をなさっておいでとは……」

密偵はひそひそ声で報告した。

「 エーサさまがたびたびアイテムを収集しておられるのは、彼からもらっているクエストのようです」

「 クエスト……」

「 はい、その内容から推察するに、どうやらその男は魔法使いのようですな」

「 けしからん、魔法使いからクエストをもらっていたというのか……
…なんとも怪しげな魔法使いだな」

実直な性格のゲールハーツは、不満を隠そうともしなかった。そのせいか、教え子のエーサとの関係についてたびたび変な噂が立つのだが、本人はまったく気にした風ではなかった。

「その、魔法使いとはどんな男だ？」

「はい、素性は不明ですが、かなりの美形の方です」

「美形か、曖昧な表現だな……もう少し詳細を聞けないか？」

「はい、その魔法使いは異様に背の高い色白の男で、しかもかなりの魔法の腕前（美形）と聞いています。自ら光る白髪と、見る角度によって色が変わる不思議な目を持っており、着崩れしたワイシヤツをだらしく身につけ、しかしとてつもない一霸気の持ち主（美形）です。主に食べているのは屋敷に備蓄してある薬草や木の実の類を使ったパンやスープであるらしく、以前、エーサさまのほつぺたについていた食べかすを分析してみたところ、おそらく男は相当のグルメ（美形）かと思われ」

「はっ！？ 言葉の一つ一つが『美形』に聞こえるっ！？ なぜだ、そこまでコンプレックスを抱いていたというのか、この私が！」

幻聴を追い払うように耳をふさいで、ゲールハーツは唸った。

このごろは寝不足のせいもあってか、彼は妙に苛ついていた。

その原因も勇者がらみであることは間違いなく、城内にさらに色恋沙汰の噂を呼んでいた。密偵もいつ自分が八つ当たりされやしないかと、心なしか青ざめてさえいる。

生真面目なゲールハーツは決して八つ当たりなどしないのだが、テーブルの上で親指を打ち合わせ、かちかちかちと周囲を不安にさせる不快な音を立てていた。

「魔法使いか……ふん、私がこの世で最も忌み嫌うジョブだ……そうか、それで彼女は魔法の授業だけは熱心に受けているのだな……私の剣の稽古をおろそかにするのはそういう裏があったのか……い

けない、これはいけない兆候だ……！」

ゲールハーツの中で対抗意識がめらめらと燃え上がった。

「いかんっ！ 魔法などもつてのほかだっ！ 伝説の勇者さまは、白兵戦でガンガン敵にぶつかってこそ……数多くの傷を作ってこそ、伝説にもなれるというものだ……っ！」

嫉妬に打ち震えるゲールハーツだった。

密偵はなるべく目を合わせないように、資料に目を落としてさりげなく呟いた。

「それと……その魔法使いは、今夜城に来る予定となっております」「なんだとっ！ い、いかん、それはいかん！ この魔法使いの事が公爵さまのお耳に触れてしまつては、軟弱な『魔法使い勇者』などというものが公認されてしまう恐れがある！ 教育係の我々の首もただではすまんぞ！ なんとかしても止めなければっ！」

「いえ、恐れながら……それがもう、この魔法使いのことは公爵殿下のお耳に入つてしまいました……」

あせんとするゲールハーツに、密偵はさらにおそろおそろ付け加えた。

「公爵殿下が、その男を今日の晩餐にお呼びになったのです。是非とも会いたいとの仰せでした」

「……」

晩餐に呼ばれるほどお気に召されたということだろうか。

ゲールハーツは、ぎりりつと歯をくいしばった。

相手はすでに公爵公認。こちらは首も危うい立場である。

だが……彼は逆境になればなるほど燃えるタイプだった。

「ふっ……直接対決というわけか……！ いいだろう、魔法使い……！ どちらが勇者さまの教育係としてふさわしいか、はっきりさせてやるつもりじゃないか……！」

その日の夕刻、ミュシヤは屋敷の一室で漆黒のマントにくるまり、ずっと横になっていた。

窓の外はしんと雪が積もっている。どうやらこの時期、彼はインフルエンザにかかっていたらしい。

エーサは薬の材料を取ってくると言って、丸一日戻って来なかった。いまごろ危険な目に遭っているのかもしれない。

まずいな、このままでは、本格的にまずい。

ネズミを暖房代わりにして抱きかかえ、なんとか体力を温存しようとしていると、ドアを激しく叩く音がした。

この屋敷にやってくる人物は、エーサかその追っ手と限られている。

ふらふらと立ち上がり、ようやくの思いで玄関にたどり着いた。ドアの向こうに待っていたのは、エーサではない方の来訪者だった。高級そうな鎖帷子に身を包んだ髭の兵士だった。

「へゲニ公がお呼びである！！ 表に馬車を用意してある、至急乗れ！！ すぐに出発する！！」

へゲニ公って誰だ……。

ミュシャはぎんぎん痛む頭を抱え、無理だとは分かっているけどアの向こうに魔法をぶっぱなしたくなかった。

ヘグニ公爵とは面識こそ無いが、彼はかつてミュシャと戦ったことがある相手だ。

ミュシャが人界に放った軍団を、この土地に砦を築くことで食い止めたほどの実力者だという。

話半分に聞くだけでも先見の明のある男のようだ。

ならば当然、魔界で起こった事情にも精通しているはずである。

リノフの内乱を期に、人界からもなんらかの行動を起こそうとしているのかもしれない。

少なくとも、彼のような怪しい魔族が領地に潜り込んでいる事など、とうの昔に気づいているにちがいない。

そうだ、つまり、これは。

公爵はミュシャを元魔王ではないかと疑った上で、話し合いのテーブルに誘っているのだ。

ただの夕食会だと思っただけでばやばやしてはならなかった。

馬車から降りた瞬間から、ミュシャは王族の空気を取り戻していた。

漆黒のマントを羽織り、高熱にうなされている事などおくびにも出さない堂々とした足取りで城内を進んでいった。

落ちぶれても魔王である、その顔つきや態度を見て、すれ違う者達が、あれは一体どこの貴族かと噂せすにはいられなかった。

公爵城は剣山のような本殿と、無数の風車塔から成っている。強風を利用して水源を確保していることが窺えた。

ミュシャが案内された食堂はひどく薄暗く、窓の光が遠いぶん肌寒かった。

扁平な石造りで、片面に二十名ほど座れそうな長い食卓の向こう側に、小柄な灯鬼イソグがひとり腰掛けている。

いや、灯鬼イソグではない。よく見るとそれはしわくちやの人間で、豆のように矮小な老人だった。

「掛けたまえ」

老人は従者からナプキンをむしり取って口元を拭いていた。ミュシャは黙って、彼の真向かいの席に腰掛けた。

「君が噂の魔法使いくんか。想像以上に若くて驚いたな」

「余計な前置きは必要ない、公爵殿下。用件から話してくれ」

今は一刻を争う事態だった。

ミュシャはテーブルの上のご馳走を放置したまま、じつと公爵だけをにらみつけていた。

想像以上に年老いている。

二十年前の星に選ばれた、前回の勇者だ、年老いていて当然だろう。

ヘグニ公はにまにまと笑って、塩漬けの肉にかじりついた。

「なるほどなるほど、凄まじい覇気だ。ゲールハーツが気にかけるほどの事はある。おい、ゲールハーツくん」

名前が呼ばれると、テーブルについていたもう一人の人物が立ち上がった。

緑色の鎧に緋色のマント、近づいてよく見ると、灰色の目の下には船の形をした傷跡がある。つい最近できた傷のようだ。

こいつか。

彼がエーサに剣術を教えていた「ゲールハーツ先生」と呼ばれる男だ。

「紹介しよう、彼はゲールハーツだ。わしの親戚に当たるアルト公に仕えていてな。勇者に剣術指南をしてもらっている」

ゲールハーツは柔和に微笑み、常人離れた分厚い手のひらをミュシャの方に差し出した。

だが、ミュシャはその手を取ることもなく、彼をぎろりとにらみかえした。

ぴくつと、こめかみがひきつったように見えたが、ゲールハーツは取り乱したりせず、折り目正しくお辞儀をして、元の席に戻っていった。

こいつ、ただ者ではないな。

その後ろ姿を見ながら、ミュシャは思った。

特に手だ。彼の手は常に剣を抜ける位置から離れない。

しかも、一見優しそうな目には殺意をたぎらせていた。

警戒心をむき出しにしているのはお互い様というわけだ。

ヘグニ公爵はフォークを杖のようにふりながら、おしゃべりを続けた。

「勇者さまとは随分仲がいいと聞いている」

「向こうが勝手に寄ってくるだけだ」

「さすがいい男は言うことが違うな。そこでひとつ頼みを聞いて欲しいのだが……」

来た。ミュシャは全身をこわばらせた。
用件を言う瞬間、ヘグニ公爵は小さな体をさらに縮め、全身から
凄まじい殺気を放った。

「勇者さまには金輪際、近寄らないで貰いたい。それと勇者さまに
関する情報は我が国の機密事項だ、一切他言を禁ずる。もし約束に
反した場合は相応の処置を執らせて貰う。言っている意味は分かる
かね？」

「……」

ミュシャは、しばらく答えに間を置いた。

むろん、魔王を晚餐に招いておいて、こんな用件だけで話が終わ
るはずはない。

ただの第一条件だ。べつに悪くはない条件だった。

「ああ、約束しよう……」

ミュシャは請け負った。

「その代わり、最近屋敷をうろついている密偵をどうにかしろ。あ
れはお前の所の者だろう？ 朝から晩まで私を見張るのはいい加減
やめさせる」

すると、ヘグニ公爵は表情を一変させて、かっかつかと大笑いし
た。どこをどう作ったのか分からない作り笑顔だった。

王族であるヘグニ公爵と臆することなく会談を続ける魔法使いを

見ながら、ゲールハーツは独りごちた。

似ている。

不思議な容姿だった。

自ら光るような白髪、白い肌、不思議な色の目。

それらの特徴はことごとく、彼が二十年前の戦争で目撃した魔王と一致していた。

似ている、あまりにも似ている。

だが、あくまで似ているだけにすぎなかった。

顔の作りも違えば、特に目の色がまったく違う。

まとつている雰囲気も彼の方が数段若い。ひよつとすると、年齢的にはゲールハーツよりも少し若いのではないかと思われた。

聞くところによるとアンドラハル半島は一日中濃い霧に覆われ、

日が射さない土地柄なのだそうだ。そのため、そこに住む亜人の魔族はみな肌が石灰のように白いのだという。

ひよつとすると……この男は魔族ではないのだろうか？

塩漬け肉が想像以上にマズくて顔をしかめているミュシャを見ながら、ゲールハーツはひとり考えていた。

いや、もし彼が魔王だったら、晚餐に呼ばれて、のこのこと

顔を出す訳がない。

ここは勇者の城だ。一体どんな理由があればこんな会食が成立する？

そうだ、似ているだけだ。彼はただの薬を作るのが上手な、

魔族顔の魔法使いにすぎない。

ゲールハーツの手記（イーサファルト王立博物館貯蔵品）より抜

粹

ようやく迷いを振り切ったらしい、その後、ミュシャを見るゲールハーツの顔つきはいくぶん穏やかになり、晚餐も始終穏やかな雰囲気に進んでいった。

おかしい。

会食が始まってから一時間、ミュシャはようやく何かが変な事に気づき始めた。

おかしい。さっきから世間話しかしていないぞ。

ミュシャが第一条件を呑んでから、公爵の話はずいぶん遠いところまで進んでいた。

「……それでわしの姪のリベルダ公のところには優秀な魔法使いが多いのだ。いつも自慢話を聞かされていてね。それで三十年前に魔法使いを育てる士官を探していたのだが、なかなかこれといった人材が見つからなくてね……。だが、そんなときに現れたのが『テーゼ』という名の預言者で、わしは彼の助言に従って……」

完全な世間話である。次の条件が出されるどころか、一時間あまり世間話しかしていない。

核心となるはずの魔界での内乱や、失脚したミュシャがどうしてこの土地に逃げてきたのか、などの話は一向に始まる気配もなかった。

おかしい、何かがおかしい。と、思っていると、不意に公爵は、

はあく、とため息をついた。

「本当は君の情報を密偵から聞いたとき……彼の事だと思ってたんだがね」

「？」

「『テーゼ』だよ。わが国きつての預言者だ。ひよつとして名前を知らないのかね？ 魔法使いを見つけする方法を助言したのも、ここに砦を築くように助言したのも、伝説の勇者の出現を予言したのも、すべてその預言者だ。……だが、彼は伝説の勇者の出現を予言すると同時に、失踪してしまった……」

ミュシャもゲールハーツもぼかんとして声を出せずにいた。

人違いをしていた……というのか？

公爵はばんつとテーブルを叩いて、声を張り上げた。

「よし、決めた！ ミュシャくん、しばらく様子を観察していたが、わしは君を只者ではないと見た！ その回復薬を作る腕を見込んで、どうかね、わしの軍隊の薬師になる、というのは！ 将来的には勇者のパーティに加わってもらうこともあるかもしれんぞ、さらに巧くすれば、勇者が王に謁見するときには、その末席にちょこつと出させることも……」

急なめまいを覚えて、ミュシャは、ごちん、とテーブルに頭を打ち付けた。

勇者の仲間になれというのか！

今まで無理をしてきたのが祟ったのだろうか、しばらくその姿勢から動くことができないでいた。

私の正体に気づいてすらいない！

そうか、こいつは預言者がいないと何もできない、ただお喋りが巧いだけの老兵だ！

ミュシヤはおもむろに立ち上がると、思わずひっくり返りそうになったヘグニ公爵を見下ろし、はっきりと言った。

「悪いが、興味が無い。他をあたれ」

啞然とする公爵を残し、ミュシヤは足早に城から退出した。

歩いて帰ろうとするミュシヤだったが、後から兵士が追いかけてきた。

「公爵様からです」

おそらく口止め料だろう、彼に銅貨のつまった袋を渡した。

下手に追い回すより、王族としての懐の大きさを見せつける慣わしなのかもしれない。

が、それにしては銅貨の量が多い。それなりに重要人物とみなされているようだった。

ミュシヤは、ふん、と笑って、口止め料を受け取ることにした。相手のつぼをわきまえて、的確についてくる。どうやら仲間集めは得意なようだ。

「前勇者か……食えんじじいだ」

剣豪サージ・大剣使いイーラ

ホルト高地の天候は変わりやすい。午後に降り始めた雨は一向にやむ気配はなく、なだらかな山裾の馬小屋を包み込んでいる。

馬小屋には数頭の馬とエーサがいた。

せっかく手に入れた貴重な薬草が水に濡れてしまわないよう、鎧の中に隠して、彼女は雨の降りしきる草原をじっと眺めていた。

「なかなか降り止まないでござりまする……困りましたのう」

やはりミュシャの助言をもらえなかったのがいけなかったのか。

すぐに戻るつもりが、今回のクエストは材料を手に入れるだけで丸一日かかってしまった。

帰ったら、ゲールハーツは怒るのだろうか。

ごしごしと顔をこすったら、弾みで涙がでてきた。

「ひっく……っく……」

エーサはくしゃつと顔をゆがめると、肩を揺すって泣き始めた。

馬たちも様子が気になるのか、この闖入者を心配そうに見つめていた。

そんなとき、とつぜん馬小屋に剣を担いだ少年が訪れた。

つんつん尖った髪、鋭い目つきに尖った細い顎、刃物のような鋭い印象を受ける顔立ちだ。

「ごめん、馬欲しいんだけど」

エーサが何より驚いたのは、その鎧だった。こんなに強烈な赤色の鎧は見たことがない。

まるで血に一晩漬けていたように真っ赤なのだ。

「ん、この鎧が気になる？ ショップがあったら教えてあげたい所だけど、残念ながらこれは世界に一個しかないくらいレアなアイテムだから。」

西部を旅している時に見つけた『紅鉄』ってやつを砂漠のドワーフの職人に鍛えて貰ったの。

俺はいつも傭兵みたいな事をやって日銭を稼いでるんだけどさ、この鎧を着て任務に失敗したことは一度も無い。

なぜなら敵がみんな俺に向かってくるんだ。ところで馬欲しいんだけど？」

エーサはぽかんと口を開けて、馬小屋に並んだ馬たちと、突然現れた真っ赤な鎧の男を見比べた。

「馬……でござりまするか？ 分かりませぬ、わたくしはこの者ではありませぬゆえ……」

「考えている暇はないわ、サージ。借りて行きましょう」

エーサはぎゃつと悲鳴を上げた。

真っ赤な鎧の男の向こうに、なにか巨大なモノを担いだ人影があったのだ。

一体何を担いでいるのか一目では理解できない。お城の建材か何かのようにも見える。

かなり長身の女性であるらしく、男の頭越しにエーサを見下ろしている。

「町が焦土になるといふときに、馬二頭いなくなったところで誰も気づきはしないわ」

「どうせその剣運ぶのに馬二頭使うだろ？ 四頭同時にいなくなっ

たら馬使いたい他の奴が大変だろ」

「私が貴方を負ぶって走ったら万事解決よ」

「そこまで弱つちゃねえよ俺は……まあいいか、事態が事態だし」

二人は勝手に馬を借りていく事に決めてしまったらしい。

人が見ているというのに、なんと大胆な馬泥棒だろう。

ずかずかと馬小屋に入り込んで馬を選び始める二人の前に、エーサは立ちはだかった。

「……お待ちください！ 黙って持つて行ってはいけませぬ！」

「なんだよ、あんたの馬か？」

「いえ、ちがいます……けど、そうかもしれないのであります……」

エーサの声はだんだんと弱々しくなっていた。

「わたくしは、自分が一体なものなのか、よく分からないのであります。」

見知らぬ世界に迷い込んで、見知らぬ人々に、あなたは勇者だなどと言われてしまったのであります。

いまこの瞬間にも神様が現れて、お前はこの馬小屋の主だとお告げになられてもなんら不思議ではないのであります」

真つ赤な鎧の男は興味なさげに馬の頭をなでていた。

「ふうーん、勇者ねえ。勇者つて赤い星の英雄のことだろ？ 心配ないよ、だって勇者は俺だもん。俺よりそのカラーが似合う奴なんていないじゃないか。嬢ちゃん、見たところ戦いなんてできそうにないだろ……よっと」

やがて馬の背に飛び乗って、そのまま小屋の出口に向かった。
エーサはその馬の鼻面を抱きかかえ、動きを制していた。

「嬢ちゃん、どいてくれ。勇者が通るんだ」

「……通しませぬ」

エーサは首を振った。

「……元いた世界がどんなところで、わたくしがそこで一体何をやってきたか……あなた方には想像もつかないと思います」

顔を伏せたまま、エーサは静かな声で言った。

「……毒を盛って、人を殺したのであります。……大切な人をこの手で殺して、追われて、この世界に迷い込むまで、わたくしはただひたすら逃げていたのであります……どうして神様がわたくしを勇者に選ばれたのか、まるで分かりませぬが……戦うぐらい、どうという事はないのでございます」

「じゃあなんで泣いてんのさ……」

真っ赤な鎧の男は肩をすくめた。

女性の方も二頭の馬に建材を担がせ、自分も一頭の馬に乗って出口にやってきた。

「サージ、馬が通れないんだけど？」

「だめだ、この勇者さまが断固として俺を通さない構えらしいんだ」
「だから、その勇者さまをどかすためにあんたが邪魔になってるんだけど？」

「……イーラ、お前にとって俺はなんだ、そんなに邪魔か？」

真つ赤な鎧の男が退くと、女性の馬が前に進み出てきた。馬はエーサの黒髪をもしかもしかと食べていた。

「あなたは戦いを軽く見ている。真実なんて誰にも分からないし、誰が最も正しいかなんて誰も教えてくれない。

剣を振るう事だけが戦いじゃないわ。戦うことの意義を見つけて出して、堅く信じることも戦いだし、一つの価値を守り抜く事も戦いであるの。

あなたはまだその二つを手に入れてすらいないじゃない。戦う以前の問題よ。

これから大きな戦いが始まるけど、あなたはずっとここで馬小屋を守ってなさい、その方がお似合いよ。

けど、私の邪魔をするのなら……ここには真つ赤な血が大好きな『剣豪』がいるわ」

そう言って、彼女は真つ赤な鎧の男を見た。彼はぶんぶん首を振った。

「俺にどうしろっていうんだ……」

「……使えない奴」

「ああっ！ 使えないさ、悪いか！ お前に良いように使われてたまるか！」

サージが大声をあげた直後だった。

ふいに地響きがして、馬たちがとつぜん騒ぎ出した。

「……来た！」

「構っている暇はないわ、急ぐわよ！」

冒険者達が強引に馬を突進させると、エーサは思わず横に飛

び退いた。

四頭の馬が小屋から飛び出し、大きな建材が小屋の入り口を二カ所切り裂いていった。

彼らの向かう先に、エーサは異様な影を見た。

それは空を覆い尽くすほど巨大なドラゴンの腹だった。

その影はあつという間に頭上を通り過ぎ、冒険者達と併走するよ
うに、町の方に向かって飛んでいった。

賢者オルフェウス

「テンベスト・ミル《嵐の風車》か……」

サージは不機嫌そうに眉をしかめて、ミュンの会話に割って入った。

今のうちに体力回復をはかったのか、ポーション回復薬を一気にあおった。

「俺の冒険人生における、嫌な事件ナンバー八に入るあれだな」

「ああ、あの襲撃事件のドラゴンね」

隣にいたイーラがさらに言葉を繋いだ。

彼女はあまり過去に心が揺さぶられるタイプではないらしい、彼とは対照的に眉一つ動かさなかったが、冷え性なのか時々腕をさすっていた。

「勇者が空を飛んで、ドラゴンぶった切っちゃったやつ？」

「だから、ぶった切ったの勇者じゃないだろ？ えっ、お前なんでここまで来て俺の証言よりも俗説の方信じちゃってるの？ そんなに信用無いの？」

「あの、町の八割方が焼き払われたっていう、あの事件か？」

アツカは吠えるように口を開いて、驚きの声を上げた。興奮ぎみにへっへっと笑っている。

「へえ、偶然だな、俺も巻き込まれてたぞ、それ。世間は狭いつて奴だな」

「そりゃあ、公爵領の数千人が巻き込まれた大事件ですからね。なにしろ……」

オルフェウスは眼鏡の座りを直して、そこにいるゲールハーツと勇者を除く、六人の仲間達を見渡した。

「あの事件をきっかけにして、この《魔王討伐軍》が組織されたんだ。第一次メンバーは全員、あの事件をきっかけにして結びついたようなもんですよ」

「あの、私は……」

サーラもおおずと手を上げた。いちいち手を上げないと、彼女の声量ではみんなに聞こえづらい。

「故郷で……あの……事件の噂を聞いて……その、公爵領の、沢山の人が……怪我を……して、いるらしいって、それで……お手伝いを……したいなーと……」

「《魔王討伐軍》の？」

「いえ……『聖堂を壊した』と聞いて、本当はお小言を言いたくて……けど、ゲールハーツさんと、お話するうちに……いつの間にか……わたし……ここに……それで、事件のこと……よく、知らなくて……」

サーラは中部の言葉があまり上手く使えないので、雰囲気にならされて一緒に行軍について行く事になってしまったらしい。

「強引だな、ゲールハーツのやつ」

「あいつが人の意見を聞いたことが一度でもあったか？」

「じゃあ、サーラはあの事件の事はほとんど知らないわけですね……」

そう漏らしたオルフェウスに、不意にアツカやサージから非難が

ましい視線が集まった。

「おいおい、俺も大まかな所しかしらねえよ」

「事件が大局的に見えてんのは、軍の中にいる奴ぐらいだろ？ 結局あれ、どういう戦いだっただんだ？」

「ええっ、そ、そりゃそうか。ええと、簡単に説明すると……」

そう言っつて、オルフェウスが事件の日を振り返った。

「ドラゴンは南西からホルト高地に現れ、町をひとつひとつ破壊して回っている」

公爵領《リーベの町》を守護する皆の一室に、ヘグニ公爵領の士官達が募り、頭をつきあわせていた。

「強烈なプレス攻撃を使うが、最初のうちは直接人に使う事は無い。主に建物の破壊や進路の寸断を行っている」

「最初のうちは」

「つまり、なるべく町の中央に人を集めようとしている。……ここより南のカデンの町はひどい有様だった。」

ドラゴンは混乱する群衆の上を旋回して、一通り真上から眺めて、最後にプレス攻撃で町を跡形もなく消し去って、それから次の町へ移ってゆく」

「ばかな」

居幕の中は冬だというのに蒸し暑く、話し合っている兵士達の顔は汗でびっしょりだった。

心持ちではなく、話し声もだいぶ小さくなっていった。

「ドラゴンの目的は一体なんなんだ？ 人を食らうでもなく、勇者さまのいる公爵の砦を襲うでもなく、ただ町をひとつひとつ、手間をかけて破壊してまわっている？」

「愉快犯……のようなものでしょうか？」

そう発言したオルフェウスに、士官達の視線が集中した。

一番年若いオルフェウスは、怖じ気づいて口つぐんでしまった。

「彼の名は？」

「オルフェウス」マグナティウス、スタンリー伯爵に仕える準大魔導です」

準大魔導は魔術師部隊の中ではふつう三人しかおらず、この上にあるポジションは大魔導ただ一人である。

……といっても、イーサファルトは昔から魔術師が少なく、公領の魔術師部隊の中でも、ほんとうに魔法の使える者はたったの十五名しかいない。

あとの大半は魔法銃パレイを重用し、もっぱら彼らの護衛をしたり、移動や運搬のサポートをしたりする足軽で構成されている、非常に小さな組織だった。

イーサファルトでは希な魔法が使えるオルフェウスは、十六歳になって成人してからたった三ヶ月という驚くべき早さでこのポジションを手に入れてしまったのであるが、特に驚くべきことではなかった。

「いや、続けてくれ」

騎士の鎧に身を包んだ男が、彼に先を促した。

この公爵領では見たこともない、落ち着いた灰色の目の男だった。左目の下には船の形をした向こう傷がある。

隣にヘグニ公爵の側近が二人ほどいるので、他の伯爵の士官達も、誰かは知らないが位の高い騎士であることぐらいは分かるようだ。

「は、はい……ドラゴンは高等な呪文を扱える、魔術師のような知能の高い生物です……なので、だからこそ本来意味の無い破壊をして、ゲームのように楽しんでるのかもかもしれないと……」

「ばかな……！ そんな理由でわしの町が破壊されたというのか……！」

憤った兵士が机をどすんと叩いた。

騎士は驚くほど落ち着いた声で言った。

「私も兵法者として、憤る気持ちはお前と同じだが、相手はドラゴンだ……魔術師の気持ちは魔術師が一番よく分かるだろう。君には、このドラゴンの目的が分かるのか？」

ここで答えをしくじったら首が飛ぶかもしれない。オルフェウスは地図をじっとにらみ据えた。

彼は町のほぼ中央にある祭りの広場を指さし、弱々しい声で言った。

「……広場です。聖堂前の広場には、上から見ても十分な広さがある。ドラゴンはそこに人を集めるつもりです」

「だそうだが、ほかに異論のある者はいるか」

その点では意見が同じである事を確認するよつに、騎士は全員を見渡した。

「私に考えがあるので諸氏に聞いて貰いたい。ドラゴンが人を一カ所に集めるつもりなら、我々は人を逃がしてドラゴンの動きを操ることができるかもしれない。つまり、我々が先回りをし、中央から町の外までの退路を作れば、ドラゴンはそれを封鎖するために動かざるを得なくなる。」

騎士は、町中を流れる大水路に人差し指をおいた。

「この大水路から外に逃げられるかもしれない。この町の構造に詳しい者はいるか？ この水をせき止めることはできるか？」

「ええ、万一の時の避難路になっていますから、風車塔で操作すれば簡単ですが……しかし、この町だけで千人もの民衆がいます、どうやってそちらに誘導します？ 迂回路も多くて、とてもドラゴンがどう動くかまで予想できるものではありません、それこそ格好の標的になるのでは？」

「ならば、直線距離の退路を作ればいい。あらかじめ迂回路をすべて封鎖し、直線上にある建物の壁を破壊する。」

「無茶な！ 聖堂があるではないか！」

一斉に避難の声があがったが、オルフェウスはこの騎士の意見に興味を持った。

あまりに先進的すぎる考え方から、教会の関係者からは異端の目で見られることの多い騎士だった。

故に、彼の戦いの功績はこれまでずっといぶん隠蔽されている。

このドラゴン襲撃事件の一幕なども後に隠された功績の一つとなった。

「あなた、見ない顔だが、一体どこの騎士さまだ？」

「私はアルト公爵に仕える正騎士、《ゲールハーツィンデル》バレイ

《だ》

バレイ……？

顔は見たことがないが、名前だけはどこかで聞いた覚えがあった。というより、彼の部隊で兵士たちが使っている魔法銃の名前がそれだった。

オルフェウスが眉をひそめていると、ヘグニ公爵に仕える士官達は、全員その場にひざまずいた。

「立て、今は時間が惜しい」

「しかし……王子！」

王子だって！？

誰かが不意に漏らしたひとことに、オルフェウスは目をむいた。

「立てと言ったのだ。立て」

ようやくまわりの士官達も、オルフェウスと同じ青ざめた表情で直立した。

ゲールハーツはその場にいる者が戦慄を覚えるほど怒気のコもった目をしていた。

どうやら、彼のその怒りは上空のドラゴンに向けられているようだった。

「案ずるな、聖堂が本当に神の建物ならば、いまこの瞬間に破壊される為に建てられたのだ。」

魔族を恐れてはならない、我々の頭上にはいまなお赤い星が輝き、地上には伝説の勇者がいるのだ。

ドラゴンごときに怯懦を見せてはならない、死力を以て討伐する、それが英雄の園イーサファルトに生まれた者の使命だと心得る」

人狼アツカ

ドラゴンによって作られた障壁は、ほとんどが鐘楼で出来ていた。中心部に聖堂を有するリーベの町は、公爵領の中でもとりわけ教会の多い土地だった。

鐘楼が地面に落とされるたびに、不気味なゆがんだ鐘の音が鳴り響いた。

ゲールハーツは白馬を巧みに操って障壁を軽々と飛び越え、石で舗装された通りを風のように駆けていった。

石造りの建物を見上げると、屋根の上には滑空を決め込んだドラゴンの伸びきった翼と、ノミの形をした顎がちらりと見えた。

ドラゴンが遠ざかる隙について工作を進めていたのだが、徐々に姿が現れるまでの間隔が狭くなってきている。

それはつまり、ゴールが間近だということだ。

お前は一体何を見ている？

ゲールハーツは心の中でドラゴンに問いかけた。

そんなに愉しいのか？

悲鳴、怒声、罵詈、どれともつかぬわめき声。中央の広場からは、収穫祭をしのぐほどの凄まじい熱気が立ち上っていた

まるで鍋に閉じ込められたようである。今にも中にいる民衆が堰を切ってあふれ出しそうだ。

堪えていたつもりだったが、ゲールハーツの憤怒もそろそろ限界に差し迫っていた。

「ゲールハーツ様！」

「くわしい状況を聞かせる！」

聖堂の裏手にあつまっていた兵士達は、青ざめた顔で口々に彼の名を呼んだ。

「その……それが、壊れません！」

「ありつたけの魔石を使えと言ったはずだ！」

「使いました、火の魔石はすべて、ですがこの塀だけ、壁がとくべつ分厚く作られているようです！一発や二発では穴を貫通させられません！」

もう一度空を見上げて、ゲールハーツは対策を練った。

別の退路を、いや、それより先に、畏の位置をもう一度調整しなくてはならない。

だが、そのための会議を開いている余裕までは無い。

畏は諦めるのか？

ゲールハーツの脳裏には、過去の戦争の記憶がまざまざとよみがえっていた。

ほんのわずかでも生き延びる可能性があるのなら、畏を作ること諦め、別の退路だけを作るべきだろうか？

それでも、もし数名が生き延びられたとしても、もう次の町はない。

相手はドラゴンだ、二度は同じ手は食うまい。

吐き気がしそうだった、ドラゴンを狩るために、町をひとつ諦めなくてはならない。

不意に、ゲールハーツの視界の隅に異様なものがうつった。

怪物のように大きな大男を、兵士達が数名がかりで引きずっていたのだ。

「隊長っ！ 不審者を捕らえましたっ！」

「こいつ、この騒ぎに便乗して、そのの食堂で食料を漁っていました……ぎゃあっ！」

「がるるっ！ メシくってただけだっ！」

「嘘をつけ、この騒ぎのなかで平然とメシを食っていたなど信じられるかっ！」

「いたの！ 信じる！ バーリヤじゃよくある事なんだから！ ちやんと『いす』って奴に座って、『てーぶる』って奴の上で食べてただろうがよ！ なんか文句あつか！？」

「ナイフとフォークはどうした！」

「ナイフとフォーク！？ なにそれ！ オレなんか盲点があつた？」

毛糸の帽子を目深にかぶって頭部を隠していたが、口元は獯猛な野獣そのものの、のこぎりの様な牙をむいて唸っている。

麻縄に何重にも巻かれて、身動き取れなくされているようすだつた。

士官の一人が、病気にでもなつたかのように顔を真っ青にして、ゲールハーツに言い寄つた。

「ゲールハーツ様、恐れながら、私にはこの壁の向こうに家族がおります。それに、いささか楽観的ですが、ドラゴンも罫の危険に気づけば深入りをせず、退却をするかもしれません。そう申している兵士もここには大勢います、どうか、わずかでも可能性があるのならば……」

「……お前、バーリヤの魔法がどんなものか、聞いたことがあるか？」

「は？ なん、ですと……バーリヤの魔法は、治癒魔法でしょうか？」

「水魔法だ。再生と破壊を司る。治癒魔法に冷気魔法、そして、どんな物でも風化させる破壊魔法だ」

小隊長が大男の対応に手間取っているところに、ゲールハーツは駆けつけた。

帷幕にいなかった小隊の兵士達は、ゲールハーツの事をまだなにも知らない様子でばかんとしていた。

だが、縛られている大男だけは違った。

彼は鼻をひくひくさせて、ゲールハーツが何か言う前に、こつもらしたのだった。

「へっへっへ……おまえ、ドラゴンと同じにおいがするな？」

ゲールハーツは心臓を射抜かれたように立ち止まった。

ドラゴンライダーの血を引くイーサファルトの王家には、ドラゴンの魂と英雄の魂が半分ずつ受け継がれているという。

その言葉を聞くまで、私は自分が王族だったということを忘れていた、むしろ忘れようとさえしていた。

私の中にドラゴンの存在を嗅ぎ取った男のその一言が決定的だった。

その瞬間、私は騎士の身分に閉じこもったままであることを完全に捨て、彼を仲間にする事に決めていた。

(イーサファルト王立図書館貯蔵 ゲールハーツの手記 より抜粋)

「お前、名は」

「そんなもんあつかよ」

「『激昂^{アツカ}』か、なかなか洒落た名前だ」

「えっ、どういうこと？ ひょっとして今オレの名前が誕生しなか

つた？」

「なるほど、さぞ力自慢なのだろうな。どの程度の力を持っているか、見てみたい。……お前ならあの壁を壊せるか？」

ゲールハーツの指差す先では、すでに大勢の兵士たちが壁を打ち壊す作業に取り掛かっていた。

向こうにいる人の声が聞こえるのか、みな死に物狂いだった。今にも泣きそうな顔をして槌を振るう者もいる。

アツカと名乗る大男は、太い首をぐいっとめぐらせて、へらへらと笑った。

「高くつくぜ？」

「三回で壊せたら見逃してやる、二回で壊せたら望むものをやる、もし一回で壊せたら……私の友になれ」

「くくく、言うことまでドラゴンくさいな、おまえ。さては王様かなにかか？」

縄が解かれると、アツカはおもむろに立ち上がった。

身に着けているのはボロボロのチョッキに、丈の短いズボン、よく見ると、足の付け根にぶらーんと獣の尻尾が垂れ下がっていた。

後で適当に見繕ってやらねば、とゲールハーツは考えた。

聖堂の壁にその影が落ちて、壁にかじりついていた兵士たちが、ようやくその気配に気づき、振り返った。

アツカは兵士の一人から金槌をもぎとって、壁に向かって歩いていった。

左上から右下に、右上から左下に、ぶんぶんと金槌を振る。

分厚い壁にびたりと鼻面を付き合わせると、アツカの身長と堀の

高さは頭ひとつ分くらいの差しかなかった。すさまじい長身だった。

「さーて、一回にするか、二回にするか、そこが問題だよな……」

アツカはポケットから一握りの赤い土を取り出した。

その上にぺっと唾を吐くと、指で掬い取って壁に赤い線を書き始めた。

赤い六角形の図形である。

「産みと苦痛の母ハルテルの血において命ずる、そは六である、再生と破壊をつかさどる水の理を以って、すべての六は砂に帰すべし」

西部の魔法に造詣のあるゲールハーツも、おそらくここにいる誰も見たことの無い呪術だった。

ひととおり赤い線を書くと、準備は終わったらしい。

おもむろに大腿から後ろに向かって金槌を振り上げ、今から殴りつける部分に真っ赤な手のひらを向け、金槌を振り下ろした。

「うおおおおおおおーっ！」

がごおおおんっ！

常人の何倍もの量の筋力がすべて加わった、渾身の一撃だ。

周囲の地面にまで強烈な振動が伝わり、立っているものは体勢を崩した。

壁に不気味なひびが生じ、ひびから赤い砂が吹き上がった。

聖堂の壁は朽ちはじめるようにみるみる崩落してゆき、人一人分の大きさはあろうかという破片がぼろぼろと落ち、兵士たちはぶつ

からないように距離を置いた。

「一回ということにしよう」

などと言って振り返ったアツカの真上を、ドラゴンの白い影が砲弾のように通り過ぎていった。

ぎゅあうつうんっという耳をつんざく響きを残して、その影は瞬間的に通りの反対側まで飛んでいった。

こちらが体勢を立て直すころには、ドラゴンは翼を一度はためかせ、旗のように華麗に向きを変えてこちらに飛んでこようとしている。

どうやら聖堂の異変に気づいて急接近したらしい、とてつもない移動速度に士官たちは戦慄を覚えた。

「……速いつ！」

「ひるむな、魔術師部隊に合図を送れ！」

巨大なドラゴンは自然本来の力では空を飛ぶことができない、翼は補助的な力を得るために使い、多くは魔法の力に頼って空を飛んでいる。

この尋常でない高速飛行も魔法が可能にするものだ。

だが、相手が魔法を使っているのならば、同じ魔法の力を使う魔法使いならそれに対処できるはずだ。

聖堂の裏手には鐘楼が複数あり、それらにすでに魔術師部隊が潜伏していた。

鐘楼からいくつもの紫色の光が漏れ出すと、空中にあるドラゴンの巨体は、急に支えを失ったように高度を下げた。

ドラゴンがほえ声をあげるよりも先に、アツカが吼えた。

「す、すげーっ、本物のドラゴンだーっ！」

「効いている……！ 落ちてくるぞ！」

「ゲールハーツ様、下がってください、ここは危険です……！」

同時に、広場にあふれかえっていた人々が、塀の向こうから奔流となつて押し出されてきた。

ドラゴンが目の前にいるのにも関わらず、誰も留まる事さえできない様子だった。

混乱して他人を押し倒し、踏みつけ、ひたすら道のある方に駆けていった。

誰も服が血に染まっついていて、服装で身分を見分けるのさえ困難だった。

獲物を逃がされていることに気づいたらしい、上空のドラゴンがすさまじいほえ声を上げ、群衆が一瞬だが身をかがめた。

アツカがそれに負けないほえ声を上げた。

「おーい！ でっかい穴が開いたぜーっ！ あとで弁償してくれっ
て言つても無理だからなーっ！」

「高度が屋根まで落ちました！」

「……弓矢隊に合図を送れ！」

通りの向こうを低速で飛んでくるドラゴンに向かって、鉤のついたロープが投げ放たれた。

さらに左右の建物の窓から弓矢部隊が狙い撃ちをする。

矢ごとくではドラゴンの堅い鱗に傷をつけられるはずはない、まともに当てる為に放った矢はない。動きをさらに抑えるのが目的だ。それでも目や翼の薄い膜に何本かが突き刺さり、ドラゴンは凄まじい咆吼をあげた。

「うおおっ、危ない、こっちに落ちてくるぞあのドラゴン！」
「怯むな！ 撃ち続ける！」

ドラゴンは数十本のロープに引っ張られて、船のように進行方向を変え、そのまま脇にあった建物に頭から衝突した。

建物は屋根から崩落し、ドラゴンは建物の一番下の階にうずくまる形で墜落した。

巨大な怪物が目の前に落ちている。

「やった」

彼らが落としたのだ。その事実が兵士たちの間に実感されるまで、しばらく時間がかかった。

「落とした、ドラゴンを落としたぞーっ！」

兵士たちは歓声をあげて、我先にとその巨大な怪物に群がっていた。

それは怪物と呼ぶにははばかれる、兵士たちが息を呑むほどの美しさだった。

鱗は淡い青色で、中に宝石でも入っているかのようにきらきらと輝いている。

馬よりも長くたくましい首を丸め、まるで貴婦人のように翼の中に顔を隠していた。

「はっはーっはっ、すばらしい、なんと、最高の獲物ではないか！」

遅れて馬を走らせてきた貴族が、どや顔で周囲に宣言し始めた。

「みなの方！ このドラゴンはわが侯爵家の石弓部隊が仕留めた獲物だ！ さっそくへグニ公への土産としようではないか……あうっ」
名乗りを上げようとした部隊長が、なんの前触れも無く落馬した。周りには失笑が漏れたが、ゲールハーツはドラゴンをじっと見つめたまま、笑うことができなかった。

……抵抗しないのか？ なぜ火を噴かない？

……あるいは、わざと捕まった？

「ひ、ひいつ！」

悲鳴のした方を見ると、落馬した部隊長のそばにいた兵士だった。

「し、死んでるっ！ 矢だ、弓兵部隊の矢で射抜かれているぞっ……」

兵士たちは一斉に上を見上げた。

通りをはさむ左右の建物には、ずらりと弓兵たちが並んでいる。

「一体なんのつもりだ！」

とつぜん敵意を向けられ、弓兵の部隊長らしき男が窓から顔を出した。

「まで、一体なにがあった、こちらからは何も……！」

その弓兵の部隊長の胸に、一本の矢が根元まで突き刺さった。

後ろから突き出た先端と矢羽を交互に見せながら、彼は三階ほど

の高さから落ちていった。

「なんだ、一体どうなっている……!!」

「手柄を独り占めするつもりか……?」

「ふざけやがって……!!」

兵士たちの間に怒号が沸き起こった。だが弓兵たちも当惑している、どうすればいいのか分からずにただ青ざめている様子だった。

徐々に統制が崩れつつあったとき、歩兵部隊のリーダーと思われる人物が声を上げた。

「待て、双方、冷静になれ! 弓兵部隊、こちらの声が聞こえているのならば、弓矢の装備をはずし、窓の見える位置におけ! 自分たちが犯人ではないという証拠を示せ! 早く!」

リーダーの野太い声はよく聞こえたらしい、あわてて武装解除した弓兵たちの矢筒と弓、それにタガーが、見渡す限りの窓辺に並んだ。

頭のいい男だ、とゲールハーツは内心思いながら様子を見守っていた。

弓兵の中に犯人がいても、自分も武装解除をせざるを得ない。

この状態ならむやみに狙撃されることは無い。

狙撃を恐れていた歩兵たちも敵愾心を和らげ、落ち着きを取り戻しはじめた。

歩兵部隊のリーダーはふうむ、と唸って腕を組んだ。

どうやら弓矢部隊は全員が武装解除をしまったらしい。

だが、ゲールハーツは見てしまった。

家の中にうずくまっているドラゴンが、不気味な動きをしているのを。

翼に隠されたその目は、はっとするほど美しい緑色をしていた。まるで自分が捕まっているという感覚すら持ち合わせていないよ
うな、とてつもなく冷静で、動揺のかけらすら見えない目だった。

抵抗をしない。火を噴かない。

どうやらこれはドラゴンにとって、まだゲームの範疇だったよう
だ。

ドラゴンは翼の皮膜に突き刺さった矢をぶちっと抜き取り、口
中で転がしはじめた。

まずい、と思ったときには、その矢はドラゴンの口から音も無く
放たれて、リーダーの首を貫いていた。

兵士たちは一瞬にして押し黙った。押し黙った瞬間、ドラゴンが
立ち上がった。

ぶるぶる体を震わせてロープを簡単に解き、口の端から青白い炎
を吹いた。

「まずい、まずいぞ、退却しろーっ！」

各々のリーダーを失った兵士たちは恐慌に陥り、あっという間に
壊走しはじめた。

解放されたドラゴンは翼をはためかせ、難なく空に浮き上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6103z/>

アンドラハルの魔王

2011年12月31日13時55分発行